

英語語法文法学会

第19回大会資料

日時：2011年10月15日（土）

開催校：奈良女子大学

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋西町
[http:// www.nara-wu.ac.jp](http://www.nara-wu.ac.jp)

順路

- (1) 「近鉄奈良駅」より徒歩5分。
- (2) 「JR奈良駅」より徒歩15分、あるいは路線バスで「近鉄奈良駅」下車徒歩5分。
 - 京都駅からは、
近鉄京都線で近鉄奈良駅まで特急約35分、急行45分。あるいはJR奈良線でJR奈良駅まで快速50分、普通1時間10分。
 - 大阪駅からは、
JR大阪環状線（外回り）で鶴橋へ、近鉄奈良線（快速・急行）で近鉄奈良駅まで約50分。あるいはJR大阪環状線（内回り）、JR大和路線経由大和路快速（直通）でJR奈良駅まで50分。

英語語法文法学会
The Society of English Grammar & Usage

September 2011

英語語法文法学会

第 19 回大会プログラム

(年会費 4,000 円 大会参加費：学会会員 500 円／当日会員 2,000 円 (予稿集代を含む))

日 時： 2011 年 10 月 15 日 (土) <昼食は、学内の食堂もご利用いただけます>

開催校： 奈良女子大学

住所：〒630-8506 奈良市北魚屋西町
[http:// www.nara-wu.ac.jp](http://www.nara-wu.ac.jp)

順路

- (1) 「近鉄奈良駅」より徒歩5分。
- (2) 「JR奈良駅」より徒歩15分、あるいは路線バスで「近鉄奈良駅」下車徒歩5分。
 - 京都駅からは、
近鉄京都線で近鉄奈良駅まで特急約35分、急行45分。あるいはJR奈良線でJR奈良駅まで快速50分、普通1時間10分。
 - 大阪駅からは、
JR大阪環状線（外回り）で鶴橋へ、近鉄奈良線（快急・急行）で近鉄奈良駅まで約50分。あるいはJR大阪環状線（内回り）、JR大和路線経由大和路快速（直通）でJR奈良駅まで50分。

開催校委員：内田聖二・須賀あゆみ

ワークショップ(文学系 N 棟 N202 講義室) ●研究発表(文学系 N 棟 N202・N302 講義室) ●総会(文学系 S 棟 2 階大講義室) ●シンポジウム(文学系 S 棟 2 階大講義室) ●一般休憩室・書籍展示(文学系 N 棟 N101 講義室) ●司会者・関係者(ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者) 控え室(文学系 N 棟 N301 講義室) ●大会本部・運営委員会室(文学系 S 棟 S123 講義室)

受付： 10 時 30 分より 文学系 N 棟 1 階ホール

ワークショップ(文学系 N 棟 N202 講義室) 10.40 – 11.50

- | | |
|--|-----------------|
| 1. 「 <i>To blame or To be blamed?</i> 」 | 司 会 大竹芳夫(新潟大学) |
| 2. 「もう一つのクジラの公式」 | 辻前正男(京都府立大学大学院) |
| 3. 「 <i>I've killed him</i> と <i>I killed him</i> の含意」 | 明日誠一(青山学院大学非常勤) |
| 4. 「「たまたま」と Happen to 不定詞」 | 金子輝美(愛知淑徳大学非常勤) |
| | 田岡育恵(大阪工業大学) |

受付：12時30分より 文学系N棟1階ホール

研究発表 13.00 - 14.45

第1室（文学系N棟2階 N202 講義室）

司会 松村瑞子（九州大学）

1. 13.00 - 13.35 「必要性と重要性を表す形容詞と前置詞の選択について—
necessary と important を中心に—」
松井 涼（関西学院大学大学院）
2. 13.35 - 14.10 「副詞節が名詞句を修飾するとき—構文と類推の観点から—」
金谷 優（神田外語大学）
3. 14.10 - 14.45 「最上級形容詞を伴う among の機能について—have among the
Adj-est Ns を中心に—」
藤川勝也（大阪市立大学非常勤）・五十嵐海理（龍谷大学）

第2室（文学系N棟3階 N302 講義室）

司会 梅咲敦子（関西学院大学）

1. 13.00 - 13.35 「語彙と構文の合成による意味の創発—take の項はなぜ双方向に
移動できるのか？—」
井口智彰（広島大学大学院）
2. 13.35 - 14.10 「推量を表す will と must における「時」と意味論的特徴の違い」
小澤賢司（日本大学大学院）
3. 14.10 - 14.45 「Walk one's way にみられる意味的特徴について」
金澤俊吾（高知県立大学）

総会（文学系S棟2階大講義室） 15.00 - 15.20

- | | | | |
|----------|------|------|--------------|
| ●開会の辞 | 会長 | 安井 泉 | （筑波大学） |
| ●開催校代表挨拶 | | 三野博司 | （奈良女子大学文学部長） |
| ●学会賞選考報告 | 会長 | 安井 泉 | （筑波大学） |
| ●事務局報告 | 事務局長 | 吉良文孝 | （日本大学） |

シンポジウム（文学系S棟2階大講義室） 15.35 - 17.45

テーマ 「日英語の比較—話法あるいは引用をめぐる—」

司会 内田聖二（奈良女子大学）

1. 「話法研究としてみつたれの原理—前提を減らして眺める引用表現の姿—」
山口治彦（神戸市外国語大学）
2. 「公的表現・私的表現と日英語の話法」
廣瀬幸生（筑波大学）
3. 「メタ表象からみた引用」
内田聖二（奈良女子大学）

閉会の辞 内田聖二（奈良女子大学）

懇親会 18.00 - 19.30 会場：ラウンジ（文学系S棟1階）

（懇親会費：一般4,000円 学生2,000円）

ワークショップ（文学系 N 棟 N202 講義室） 10.40 – 11.50

司会 大竹芳夫（新潟大学）

To blame or To be blamed?

辻前正男（京都府立大学大学院）

この発表では、Who is to be blamed (for this misconduct)?/Who is to blame (for the accident)? の交代に係る例文を再考察しながら、blame と accuse, condemn との振舞いの差を明らかにし、歴史的経緯や oneself を含む構文との対比も加え、blame には意味的な内省化、受動性の高まり、自動詞化といった変化があることを見る。

to blame/to be blamed の交代については、学者により分析がさまざまであり、統一的ではない。文法書では、「passive infinitive と主語＝物」、「形は active でも意味は passive になる不定詞」、「能動受動態 (activo-passive) / 受動態不定詞」、「成句」などとされている。Visser (2002) などから、歴史的 active/passive infinitive の流れ、一時 adjective と取違えられた経緯を概観し、Fischer (1991) の “he is to blame has become rare.” が妥当かどうか、Robberechts (2008) の corpus による比較が blame にも言えるかどうかもある。

もう一つのクジラの公式

明日誠一（青山学院大学非常勤）

Quirk et al. (1985: 1136) は、私たちがクジラの公式として理解している構文について、no more ... than が特別な含意（つまり、否定を強調する修辭的な効果）を持つのは more が副詞の時で、more が形容詞である (1) については、no more ... than は only as many as と同義であると述べている。

(1) Paul has no more friends than I have. [... only as many as ...]

今回の発表では、more が形容詞の場合にも、クジラの公式として解釈できる（つまり、主節の命題を否定に解釈できる）場合があることを指摘し、どのような場合にこの解釈が成立するのかについて考察する。

私見では、主節の命題を否定に解釈する要因としては、大別して、2 つある。従節の命題内容が主節の解釈に影響を与える場合と、むしろ、先行する文脈の方が主節の解釈に影響を与える場合の 2 つである。

I've killed him と I killed him の含意

金子輝美（愛知淑徳大学非常勤）

「私が直接手を下して殺したわけではないが、彼を殺したことになる」を表すのが現在完了形であり、「直接的殺人行為」を表すのが通常は単純過去形である—このように2つの形式とその意味を対立的に捉えて説明することが従来は多かった（Q.B.1960、山田 1965 など）。間接的の行為を表す単純過去形の用例は一切挙げられず、現在完了形の用例のみが示されてきた。だが単純過去形が間接的の行為を表すこともある。表現文法の立場から見ても、「私が彼を殺したことになる」が I've killed him と常に表現されるとは限らない。

(1) “I murdered Alice,” I said, and began to cry. (中略) Everybody knows that I killed her. (中略) “Oh, God” I said, “I killed her. I wasn't there, but I killed her.”
(John Braine, *Room at the Top*. Chapter 30)

(2) “I've killed him,” she thought, in a superstitious agony.

(Margaret Mitchell, *Gone with the Wind*. Chapter XLVII)

下線部はすべて、文脈から判断して、「～を殺したことになる」という話者の思いの表出である。2つの形式はなぜ間接的の行為を含意し得るのか。これらの形式の選択を決める要因は何か。文脈を伴う実例に基づいて、文法形式がもつ意味と語用論的要因の両面からこの種の言語現象の特徴を探る。

「たまたま」と Happen to 不定詞

田岡育恵（大阪工業大学）

(1)、(2) の happen to 不定詞を日本語に訳す場合、「たまたま」を用いるのはおかしいが、これは、(3)、(4) が示すように、「死んでいる」、「好きだ」という非意図的な事態が「たまたま」と共起しておかしいということではない。

(1) He happens to be dead. [彼は（？たまたま）亡くなっている。]

(2) But I happen to like green. [しかし、僕は（？たまたま）緑が好きだ。]

(3) 交通事故で人を殺しておいて「たまたま死んだ」って裁判で言ってる。

(4) 好きになったのがたまたまフランス人だった。

(3)、(4) の下線部は、(5a,b) のように言い換えることができ、これを裏返せば、それぞれ括弧内のような想定が考えられる。

(5) a. 死んだのは交通事故に遭ったからではない。(死んだのは交通事故に遭ったからである。)

b. 好きになったのはフランス人だからではない。(好きになったのはフランス人だったからだ。)

「たまたま」には他に稀少事態を表す用法もあるが、これに対応する happen to の用法は見受けられる。発表では、「たまたま」と happen to 不定詞の対応を見て、「たまたま」と訳せない happen to の用法について述べる。

必要性と重要性を表す形容詞と前置詞の選択について
—necessary と important を中心に—

松井 涼 (関西学院大学大学院)

「必要」の意味を表す形容詞 *necessary* と「重要」の意味を表す形容詞 *important* は、前置詞 *to/for* NP を後続させる場合、(1a,b)のようになる。

(1) a. The book was necessary *to/for* you.

b. The book was important *to/for* you.

これまで、「必要」と「重要」の意味を表す形容詞に後続する前置詞として *to* が適当であるのか、それとも *for* が適当であるのかといった問題については、ほとんど論じられていない。

本発表では、このような現状を踏まえ、英英辞書の記述そして BNC のデータを提示し、それらの用例を観察することによって、形容詞が表す「必要」と「重要」という意味が、前置詞 *to* と *for* の選択に関して、それぞれ深く関与しているということを主張する。

副詞節が名詞句を修飾するとき—構文と類推の観点から—

金谷 優 (神田外語大学)

副詞節が名詞句を修飾する点において、通常の規範 (名詞句は形容詞的要素により修飾される) から逸脱する (1) のような事例が容認される場合がある。

(1) His destruction of the fortune cookie before he read the fortune...

本発表では、このような構文が容認される (場合がある) のは、意味的に関連する文法的な構文 (e.g. *He destroyed the fortune cookie before he read the fortune / before his reading the fortune.*) との類似に基づく類推によるものであると主張する。また、この帰結として、被修飾要素の名詞句と修飾要素の副詞節には以下のような意味的制約が課されることをあわせて主張する。すなわち、修飾される名詞句は命題を読み込むことができるものであり、修飾する副詞節は Quirk et al. (1985) の分類による *sentence adjunct* である。これらの主張により、先行研究でうまく捉えられていたことには矛盾することなく、問題となる点は解決することができる。また、(1) のような構文の容認度が話者により異なる事実も説明可能となることを示す。

最上級形容詞を伴う among の機能について
—have among the Adj-est Ns を中心に—

藤川勝也（大阪市立大学非常勤）・五十嵐海理（龍谷大学）

本発表では、This state has among the highest divorce rates in the U.S.のような have に among+the+最上級形容詞+複数名詞（以下、among the Adj-est Ns）が後続する現象について考察する。ここでの among は one of を意味し、be 動詞に後続する場合でも同様の解釈が得られることが辞典に記述されているが、詳細な分析はこれまでのところ皆無である。本発表では、前置詞句が名詞句的に解釈される他の現象（e.g. Bresnan 1994）を手掛かりに、以下の主張を行う。①among the Adj-est Ns は前置詞句として機能し、②have among the Adj-est Ns という形式は、have [_{NP} N_i [_{PP} among the Adj-est Ns_i]] という意味構造を持ち、③この構造で、NP 指定部の N が単数であれば、among は‘one of’と意味的に等しくなるため、one of the Adj-est Ns に再分析される。また、among the Adj-est Ns は共起する動詞が制限されることを観察し、その意味論的な要因を指摘する。

第2室 (文学系 N 棟 N302 講義室)

司会 梅咲敦子 (関西学院大学)

語彙と構文の合成による意味の創発—take の項はなぜ双方向に
移動できるのか?—

井口智彰 (広島大学大学院)

(1) a. John took the book from Mary.

b. John took the book to Mary.

英語動詞 take の目的語である the book の移動の方向は (1a) と (1b) で異なり、(1a) では John に向かって、(1b) では Mary に向かって移動する。このような現象は他の類義・関連動詞には見られない。

(2) a. *John gave the book from Mary.

b. John gave the book to Mary.

例えば、(2a,b) に見られるように、反意語の give では移動の一方向性は必ず守られる。Get, receive, obtain 等の類義動詞においても同じ傾向が見られる。本発表では、コーパス等の言語データを用いて、この現象の記述と解明に取り組む。最初に、先行研究を概観し、take の語彙的・語源的意味の定義付けを行うことから始める。次に、大規模コーパスを用いて、take と他の類義・関連動詞の目的語 (名詞句) を中心とした共起語の分布を調査する。この調査の狙いは、他の動詞との比較により、take の意味的な特徴を明確にすることである。これらの調査結果を踏まえて、「take の目的語の移動の方向性は、語彙的意味と構文的な意味の合成により決定される」と結論付ける。

推量を表す will と must における「時」と意味論的特徴の違い

小澤賢司 (日本大学大学院)

推量を表す will と must を比較すると、① will とは異なり、must は未来の事態に対する陳述には使用できないという相違点が存在し (cf. (1))、②現在の事態に対する推量を表す場合、通常異なる確信度を表す両者が、ときには同程度の確信度を表すこともあるという一種の矛盾が存在する (Leech (2004³: 86) は、(2) における will を must に変えても、意味の違いがほとんど生じないと述べている)。

(1) Don't go near that parcel! It {will / *must} explode. (澤田 2006: 214)

(2) a. By now they {will / must} be eating dinner [looking at one's watch].

b. That {will / must} be the electrician – I'm expecting him to call about some rewiring [on hearing the doorbell ring].

本発表では、以下にあげる問題を「時」と意味論的特徴の違いという観点から考察する。

- (3) **must**は過去や現在の事態にだけでなく、未来の事態に対する陳述にも使用することが可能なかどうか。
- (4) 現在の事態に対する推量を表す場合、なぜ **will** と **must** はほとんど意味の差がなく交換可能となるのか。

Walk one's way にみられる意味的特徴について

金澤俊吾 (高知県立大学)

Goldberg (1995) は、「Way 構文において、動詞が移動の手段を表す場合、行為の困難さ (difficulty) を表さなければならない」という意味的制約を提案している。しかしながら、**walk** が Way 構文に生起する際、この意味的制約の適用は随意的であり、行為の困難さを伴う解釈がなくとも、Way 構文として容認される場合がある (She only smiled her new smile of secret knowledge and **walked her way contentedly** ...)。また、**walk** が Way 構文に生起すると、着点や通過点を表す前置詞句が省略される傾向が強く、形容詞が **one's way** を修飾する場合に顕著である (With staff in hand, he slowly **walked his weary way**.)。

本発表では、**walk** が生起する Way 構文は、当該動詞が語彙的に取りうる統語パターンから、合成的に (compositional) 形成されるパターンであると主張する。**Walk** は、語彙的に、直接目的語の位置に、距離や経路を表す名詞句を取ることができる (He **walked miles to the school**./ They **walked a long and weary way**.)。Way 構文に生起する **walk** もまた、これと同様の統語的振る舞いを示すことから、[one's way-PP] において、[one's way] は主語名詞が 移動する経路を、[PP]は着点や通過点を、それぞれ表すと提案する。

本発表での提案により、**walk** が生起する Way 構文において、「行為の困難さ」の意味的制約が随意的に適用される理由と、前置詞句が省略される傾向が強い理由を、それぞれ説明できることを示す。

シンポジウム（文学系 S 棟 2 階大講義室） 15.35 – 17.45

テーマ 「日英語の比較—話法あるいは引用をめぐる—」

司会 内田聖二（奈良女子大学）

日本語と英語の比較対照研究はおそらくもっとも古い研究テーマであるが、同時にそのときどきの言語理論を反映する新しい研究分野であるとも言える。その比較対象は音、語から発想に至るまで多岐にわたるが、本シンポジウムではいろいろな文法事象が凝縮されている話法あるいは引用現象に焦点を当てる。それぞれの言語における話法のとらえかた、引用の仕方などの基本を踏まえた上で、異なる点、共通する点などを新しい物差しで探してみたい。

まず、3人の講師それぞれの立場から自説を説明し、その後他の講師へのコメントを述べる。最後にフロアーからのコメントを交えながら議論したいと考えている。

話法研究としみつたれの原理 —前提を減らして眺める引用表現の姿—

山口治彦（神戸市外国語大学）

話法の研究はこれまで、たとえば、次のような前提を当然のものとしてきた。

(1) 話法とは報告・再現のための言語手段である。

たしかに、話法はある発話を報告・再現するために使われることがある。しかし、それ以外の目的で話法が用いられないとはかぎらない。これまでの話法の研究は、語り (narrative) のコンテキストで用いられたデータをおもに念頭に置いていたために、(1) の前提を検討することなく受け入れてきたわけである。そして対話 (dialogue) の場面でしばしば用いられる引用表現を無視してきた。話法研究の視野は知らない間に狭められてきたのである。

とすれば、これまで当たり前とされてきた前提であっても、根拠がすぐさま見つけられないものは取り払って話法の使用例を見つめ直したら、引用表現の新たな姿が明らかになるかもしれない。本発表の目的は、そのような「オッカムの剃刀」的な見方 (しみつたれの原理) にのっとして、いわゆる直接話法と間接話法の位置づけを、日本語と英語のデータをもとに再考することにある。伝統とは異なる視座を導入することで、話法を複眼的に眺める意義を主張したい。

公的表現・私的表現と日英語の話法

廣瀬幸生（筑波大学）

英語では直接話法・間接話法という文法的区別が確立しているのに対し、日本語ではその区別がそれほど明確でない。しかし、日本語の引用研究が明らかにしてきたように、日本語でも直接話法・間接話法にあたる区別が少なくとも現象的には存在すると考えなければならない。そこで、本発表では、これまでの一連の拙論に基づき、直接話法・間接話法という概念自体に頼らずに、日英語の話法現象を捉える枠組みとして、次の2つの仮説を提示したい。①直接話法とは「公的表現」の引用であり、間接話法とは「私的表現」の引用である。②英語は「公的自己」中心の言語であり、日本語は「私的自己」中心の言語である。①でいう公的表現とは聞き手に対する話し手の伝達意図が想定されるレベルの表現であり、私的表現とは話し手の思いを言語化しただけで、聞き手への伝達意図が想定されないレベルの表現である。②でいう公的自己とは公的表現の主体、つまり、伝達主体としての話し手であり、私的自己とは私的表現の主体、つまり、思考・意識の主体としての話し手である。日英語の話法現象は（描出話法も含めて）共通点は仮説①から、相違点は仮説②から説明されることを論じる。

メタ表象からみた引用

内田聖二（奈良女子大学）

他の者が心のなかで思っていることを表象すること、すわなち、メタ表象を引用と関連付けたのは Sperber (2000)、Wilson (2000) であった。つまり、第三者が思っていることや口に出したことばを相手に伝えることをメタ表象の一環であると考えたとそれ自体独自の現象と思われていた引用も広く認知語用論的な現象ととらえ直すことができるのである。本発表では関連性理論の概念を援用しながら、引用をメタ表象現象ととらえることでみえてくる新しい視点を紹介し、そうすることで両言語の引用を統一的に説明できることを示す。また、日本語、英語ではメタ表象のプロセスがそれぞれの言語にどのように反映されているかという点で特徴的な対照をなしていることを考察する。従来、話しことばと書きことばとは引用あるいは話法は別個の視点から説明されていたものもひとつの原則で処理できることにも言及する。